

万葉萩歌の風土文芸性

新垣幸得

萩に関する歌が、風土とどのような姿で結びつくか、まず萩が詠まれた地域は、主として大和地方(平城宮)を中心とする周辺と、畿内、筑紫、越中、越前、といった所であり、作者層といえども、明らかなのは、皇族や朝廷の官人が多く、全歌数一四二首の約四十%、五七首ほどにすぎない。その約六十%、八五首は作者が明らかでない。これらの作品は、巻七以下巻十三に含まれているが、特に巻十の七五首が圧倒的多数を占めている。

ところで作者の位相を構成する社会環境と風土とは無関係ではないと思われるので、不明作者の誕生する背景を考えて見るに、巻十の撰定時代は不明であるが、作品の収容が、古歌集、人麿歌集という、明日香、藤原時代に次いで、その多くは、奈良時代の生活気分の反映と見られるもの等のことから、天平末期以前と想像され、或は末期を遠くは出ないものであるかも知れない。

その作者層の多くは、新歌風の興隆と共に、先行歌は、その規範として有用し、古歌転用という形で、同形歌が重出し、愛誦歌、もしくは共通感から、一部の語を変え、句を襲用することによって小異歌が自作としてまかり通るといふ模倣性が通用し、類歌性が幅をきかず、いわゆる「先代的な非個性等質の社会の残照のようなもの」があった。そして、編集者の部立、分類を重要視するという態度が、特に巻十などに四季という部立に分けて大きく分類され、その中で雑歌、相聞に分け、更に詠物、寄物に分類して、それぞれに、各項目と内容に細分化して分類するという労が払われ、巻八の四季分類を更に押し進めるといふ反面には、多くの作品が蒐集され、したがってその分類の多様化

と相まって、多くの歌数になり一巻としての極限に達すれば、作者名は省略するということもあり得ると思われる。それに作歌の参考としては、特定の作家のものだけでは、意を満たすことが出来ず、広い層から、多くの作品を求め選択するという態度もあつたかも知れない。

とにかく巻十は、意欲的に分類意識が働いて編集が行われたであろう。全二十巻中、最も数の多い巻(五三九首)となり、作者不明歌の数からいっても、四七〇首(古典文学大系)という最多数になつてゐる。ただし、収容歌数中の作者不明歌の割合は、巻十二の方がより高い。またこれらの巻は、作歌の参考のための各人の手控を基礎にして手を加えたもので、「各巻相互の連絡なしに、銘々が手ん手に集めた私集であり、全くの備忘録」であつたとすれば、神田秀夫氏がいわれるように、「作者の名など明記する必要はほとんど感じなかつた」のかもしれない。このような事情から多くの類歌が同じ巻内にも各巻相互にも持ち込まれ、作者名を記録する態度を失つたものの集りとなつたのであろう。とにかく、同形歌、小異歌の重出を意識的に避けようとしなかつた当時の歌壇を形成する人士の風潮と規範意識に裏づけられた、編集操作の中で行われたもので、家持や福麿¹⁰⁾だけでなく、大和を中心とする奈良朝の風流文芸を盛んにしていった作者たちもその周辺にあつたものである。したがつて、多くの作家群を予想させるこれらの巻は、当時の歌壇の一般的水準として、ある意味では、大衆的な潜在勢力の横溢を感じる作品が多いと見られるが、これらの作品の地域的な構成の在り方に焦点をあて、風土文芸の中の野の文芸としての性格を明らかにしたい。

二

先ず野の文芸として見た場合、野、原、野辺、岡、岳、崎、山、郷、旅、玉梓の道、等によつて表現される作品が五八首あるが、具体的には左の番号である。

高野	野辺	— 231
高野	野辺	— 333
高野	小野	— 970
栗栖	の	— 1047
飛火	が	— 1363
飛日	野	— 1431
春百	野	— 1468
小蘆	野	— 1530
城野	野	— 1530
伊香山	野辺	— 1533
隱野	野	— 1536
秋野	野	— 1538
秋野	野	— 1597
野	野	— 1598
高野	野辺	— 1605
宇陀	野	— 1609
稲見	野	— 1772
野	野	— 2095
阿太	野	— 2096
萩原	野	— 2097
飯宿	野	— 2100
高松	野	— 2101
野	野	— 2103
沙類	野	— 2106
野	野	— 2107
小野	野	— 2118
高野	野	— 2121
春日	野	— 2125
萩原	野	— 2142
敷野	野	— 2143
敷野	野	— 2153
秋野	野	— 2154
野	野	— 2155
佐保	野	— 2221
野	野	— 2231
野	野	— 2252
花野	野	— 2285
秋津	野	— 2292
秋野	野	— 3677
野	野	— 3691
石野	野	— 4154
石野	野	— 4249

首になる。その外の歌は、相聞、譬喩等に詠まれたもので三三首である。

すなわち、萩歌一四二首のうち

野、山、岳を合せて

五八首

(イ) 野と思われるもの

八首

野にふさわしく詠まれたもの

一四首

計八〇首……………五六・三%

(ロ) 屋戸(庭園)のもの

二九首

庭で詠んだと思われるもの

一首

計三〇首……………二一・二%

(ハ) 相聞、譬喩等として詠まれたもの

計三三首……………二二・五%

常識的に考えても、萩は野のものであるが、このように分類して見ると、それが一層明らかになる。野とそれ以外とは、凡そ六・二・二の割合である。また、相聞や譬喩のものも、その多くは、野山における観賞が着想や表現の動機となつてゐるであろうから實質上はもっと多いことになり、野の文芸としての性格は一層拡がりを持つことになるであろう。このように多くの地域とそれに関連して詠まれるというところに、萩の歌の万葉における風土性があるといふべきであろう。

これは、万葉人達が、秋の野に於いて、生活を癒し、潤おし、安らぎを求めると共に、風流、典雅な、極めて独特の風土に自然との豊かな交流の世界を持ち得たのであって、今日の都人や、鄙の人達が、閉塞的な冬の寒さから解放されて、麗らかな春の野に遊び、夏の酷暑からの解放として爽やかな秋の野に競い立つのは、万葉における野遊びが、日本の国土に於ける伝統として現実に生きている姿であるが、それは極めて気象現象に支配されているものと享けとれるのである。

ここで氣象現象と生体との關係を考えて見たい。われわれの生活環境は、常にその地域の氣候型に取り巻かれており、氣候を形作る要素としての氣象現象に立向つて生活しているのであるから、氣候学的な変化は、われわれの生活を規制しているということができる。このことは四季の変化にわれわれが対応して生活していることで明らかである。

ところで氣象現象と生体との關係であるがこの二者の調和が乱れることによつて病気が起こるといふことは、古く中国の古典、「素問」に「天の邪氣を感じればすなわち五臟を害し、水の寒熱を感じれば六腑を害す。地の湿を感じれば、すなわち皮肉筋脈を害す。」という。これをもつて見ても、われわれは風土そのものを生きる人間でなければならぬ。氣象学的に見れば、不連続線を形成する氣団と氣団のぶつかり合いによつて起る複雑な氣象現象は、前線の通過時にあたつて、大氣ははげしく混乱し、大氣汚染質や、空氣イオンの変動等によつて、いわゆる氣象病が発生するといわれる。例えば、通過前に喘息性氣管支炎、通過時に腸失患、通過後の感冒とそれぞれ多発するという統計は、氣団の移動によつて、天氣の変化がもたらされ、これによつて體の変調や病氣の悪化が起こるといふ考え方であつて、われわれの生体は微妙に環境と調節を保つていて、急激な氣象の変化によつてその調節が破れる結果だとすれば、われわれは正しく風土の條件を受容する立場におかれる外はないのである。このように氣象学的、氣候学的條件が、人間の體に及ぼす影響は甚大で、ある氣象要素と要素の共同によつて強め合い、逆に弱め合うといふ氣象要素の相乗的な集り、換言すれば総合的な結果として、われわれの生体では、質的に異つた反応が作り出されるわけである。

一方、ある地方の風光や、地誌的諸要素もわれわれの生体に影響を与えていることも事實である。即ちよい氣候、美しい風景がわれわれの快よい情緒をよび起こすことは、誰もが経験済みである。それはなぜか、

山岳や草原は、豊富な太陽光線に恵まれ、平地のように凝結核が小さく、清淨な空氣に満ちており、山林や草原の空氣は、植物自身の自然免疫によつて爽やかさと芳香を持統している。草原や山地においては運動度の高まりが、消化

器系統に適当な刺戟を与え、食欲は増進し、青い空や、広びろとして展開する美しい眺めは、心持よい気分を呼び起こし疲労の感さえ弱められる。さらに日常生活から離れて違った氣候風土の土地に出かけ、山地のような広い範圍にわたる氣温の変化や、強い日射は、神経末端に富んだ皮膚や粘膜に刺戟を与え、単にそれらが生体に直接影響を与えるばかりでなく、心臓や、肺、血管系統に活力的変化をひき起こす。このような山の風光や複雑な氣象的要件にふれることは生命活動の水準を上げ、生体の環境變動に対する耐久力を養うことにもなる。そうしてこのような体験を持つことは、日常生活の過程の中で形成された不都合な条件結合を断ち切り、いわゆるストレスを解除するという効果を顯わすことは間違いないことであろう。われわれが氣晴らしに山登りや旅に出掛けるというのも、それはすでに日本の伝統として、遊山や、行や、遍路に求めることが出来る。

万葉歌人たちが、奈良の暑熱と、高湿度や無風といういわば苦しい生活環境から逃れて、山野に遊び、初秋の風に吹かれ、秋の八千草に心を慰め、鹿の声に耳を傾け、萩の花に風流を味わうなどということは、けだし、求め得て妙といわなければならぬであろう。

四

さて萩が彼等の心の憩いの場としての、野において美しく魅力的であったが故に、これをその延長として家庭に持ち込まれたのもけだし当然であった。憶良が詠んだ秋の七草のうちで、瞿麦の歌が集中凡そ二六首詠まれているうちで、十首が屋戸に植えられて觀賞されたのは特筆すべきであるが、尾花は僅かに五首、葛は一首と少いの、萩が庭園でこんなに多く栽培されていたことが、椿なども一首しか詠まれていないところを見ると、誠に異状であり、栽培に容易であるという事の外に当時の人々の美的情緒に対する趣向の現れではないかと思われるのである。

萩が強烈に、彼等の觀賞の対象となつた諸原因は、明らかにされなければならないであろうが、そのうち最も重要なものとして、氣象現象による季節の変化に伴つて表われる種々の素材との構成の在り方ではないかと思われるので、それを次に述べなければならぬ。

そこで萩が自らを主題とし、或は媒介として、多く詠まれている事実に即して、個々の素材と、萩との關係を考え

て見た場合、特に露や鹿が、どれ程萩を詠むための素材、若しくは媒材に参与しているか、又は萩が、露や鹿を詠むための素材（媒材）として、どれ位荷担しているかということ、萩が他の素材との関連においてどんな問題を提起するものなのか興味の存することである。ところで歌をバラバラにして素材を分析して見たところ、歌の価値評価にはならないとしても、この分析される個々の素材が、作品成立のための構想に参与して、美的創造過程を経て一つのまとまりを持つ卓れた作品が誕生するであろうことを思うとき、個々の素材は、その在り方に重要な役割を持つことは必須でなければならぬ。そのような意味から具体的な、素材の代表的なものを集中から摘出、二、三の例歌をあげ他は番号で示す。

(一) 露、三六首

- さ男鹿の朝立野辺の秋萩に珠と見るまで置ける白露 八・一五九八 大伴家持
 秋萩の上に置きたる白露の消かも死なまし恋ひつつあらずは 八・一六〇八 弓削皇子
 秋萩に置ける白露朝な朝な珠としそ見る置ける白露 十・二一六八 作者不明
 白露と秋の萩とは恋ひ乱れ別くこと難きわが情かも 十・二一七一 不明作者

- 霜—1047
 霜珠—1547
 白露—1579
 霜—1580
 露—1595
 露—1597
 霜—1600
 霜—1605
 露—1617
 露—1618
 露—2095
 露—2099
 露—2102
 露—2116
 霜—2127
 霜—2153
 霜—2170
 露—2173
 露—2175
 露—2182
 露—2204
 露—2213
 露—2225
 露—2252
 露—2254
 露—2255
 露—2258
 露—2259
 霜—3324
 霜—3691
 露—4297
 露—4318

(二) 鹿、二四首（一七六二を入れた場合二五首）

- わが岡にさ男鹿来鳴く初萩の花婦問ひに来鳴くさ男鹿 八・一五四一 大宰帥大伴卿
 秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ 八・一五五〇 湯原王

(三) 妻 呼—1047
萩 野—1547
鳴 朝立つ野—1598
胸 妻 恋—1599
妻 妻 恋—1609
妻 妻 枕—1761
妻 妻 問—1790
妻 妻 思—2094
妻 妻 問—2098
萩 萩 原—2142
萩 萩 萩—2143
うらぶれ—2144
声 つぎ—2145
妻 恋—2150
わび鳴き—2152
妻 問—2153
わび鳴—2154
散らまく—2155
露 別—4297
胸 別—4320

秋風 一七首
秋風は日にけに吹きぬ高円の野辺の秋萩散らまく惜しも

十・二二二一
二十・四五一一

作者不明
大伴家持

(四) 秋風—1468
風 —1542
秋風—1597
風 —1617
秋風—1628
秋風—2096
秋風—2102
秋風—2103
秋風—2108
秋風—2109
秋風—2115
秋風—2204
秋風—2205
秋風—2231
秋風—4219

雨 七首

明日香川行廻る岳の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ
私萩を散らす長雨の降る頃は独り起き居て恋ふる夜ぞ多き

八・一五五七 丹比真人
十・二二六二 作者不明

時雨—2094
雨 —2097
雨 —2116
時雨—2215
時雨—3324

(五) 雁 七首

秋萩は雁に逢はじと言へればか声を聞きては花に散りぬる
雁来れば萩は散りぬとさ男鹿の鳴くなる声もうらぶれにけり

十・二二二六 作者不明
十・二二四四 作者不明

雁 —1575
雁がね—2097
雁がね—2276
雁 —4224
雁 —4296

(丙) 尾花 七首

人皆は萩を萩といふよしわれは尾花が末を萩とは言はむ

十・二一〇

作者不明

秋津野の尾花刈添へ萩の花を葺かさね君が飯廬に

十・二二九二

作者不明

萩のき 2221
萩のき 2285
萩のき 3681
萩のき 3691
萩のき 3957

(乙) 女郎花 五首

女郎花萩まじる蘆城野は今日を始めて万代に見む

八・一五三〇

大宰官人

萩の花尾花葛花翟麦の花女郎花または藤袴朝顔の花

八・一五三八

山上憶良

萩野 1534
萩野 2107
萩野 4297

(ア) その他 (鑑賞のため行われる観察や動作)

(イ) 手折る 八首

女郎花萩手折れ玉梓の道行裏と乞はむ子のため

八・一五三四

石川老夫

萩の野に露負へる萩を手折らずてあたら盛りを過してむとか

二十・四三二八

大伴家持

折りて—2099
折りて—2105
折りて—2290
折りて—4252

(ロ) 挿頭 七首

秋萩は盛りすぐるを徒らに挿頭に挿さず還りなむとや

八・一五五九

沙弥 尼

わが背子が挿頭の萩に置く露をさやかに見よと月は照るらし

十・二二二五

作者不明

挿頭—2105
挿頭—2106
挿頭さな—4252
挿頭しつ—4253
挿頭さず—4515

(ハ) 咲く 三七首

かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも
秋田刈る飯廬の宿のにはふまで咲ける秋萩見れど飽かぬかも

三・四五五
十・二一〇〇

資人余明軍
作者不明

咲きたる—1363
咲き—1364
咲き—1368
咲く—1514
咲ける—1532
咲きたる—1533
咲く—1548
咲ける—1597
咲き—1605
咲けり—1621
咲く—1622
咲きぬ—2014
咲かむ—2102
咲きぬ—2105
咲かむ—2109
咲ける—2112
咲きに—2113
咲ける—2116
咲く—2117
咲きに—2119
咲かず—2123
咲きに—2124
咲きたる—2153
咲きたる—2155
咲きの—2228
咲きたる—2231
咲き—2276
咲ける—2280
咲きし—2286
咲き—2287
咲ける—2293
咲けれど—3677
咲き匂ふ—4154
咲き—4219
咲かむ—4444

(ニ) 散る 三五首

指進の栗栖の小野の萩の花散らむ時にし行きて手向けむ
真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩の花散る

六・九七〇
十・二〇九六

大納言大伴卿
作者不明

散りそね—232
散らし—1047
散り—1536
散る—1542
散り—1550
散りか—1557
散り—1560
散らし—1565
散り—1580
散り—1621
散らく—2094
散る—2096
散らく—2098
散らく—2108
散らば—2116
散らむ—2118
散らまく—2121
散り—2125
散りぬる—2126
散りに—2127
散りぬ—2144
散りゆく—2150
散りすぎ—2152
散らむ—2154
散らまく—2155
散らば—2175
散らまく—2215
散らす—2262
散りすぎ—2286
散らぬ—2287
散りすぎ—2290
散りに—3681
散らへる—3691

(ホ) 咲き散る 四首

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも
高円の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人なしに

十・二二五二
二・二三一

作者不明
笠金村

咲きて散り— 120
咲きて散り—2289

(ハ) 枝 七首

見まく欲りわが待ち恋ひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり
ゆくりなく今も見が欲し秋萩のしなひにあらむ妹が姿を

十・二二二四
十・二二八四

作者不明
作者不明

萩の枝—1047
枝—1363
をを—1595
をを—2170
をを—2258
枝もとをを
枝もとをを

(ト) にほふ 八首

ことさらに衣は擻らじ女郎花咲く野の萩ににほひて居らむ
宮人の袖付衣秋萩ににほひよろしき高円の宮

十・二一〇七
二十・四三一五

作者不明
大伴家持

にほひぬ—1532
にほふ—2100
にほひに—2014
にほへる—3656
にほはす—3677
にほふ—4154

(チ) 色づく 八首

この頃の曉露にわが屋戸の秋の萩原色づきにけり
さ夜ふけて時雨な降りそ秋萩の本葉の黄葉散らまく惜しも

十二・二二二一
十二・二二二二
十二・二二二三
十二・二二二四
十二・二二二五

作者不明
作者不明
作者不明

る—1575
 むち—1628
 ぬき—2204
 ぬち—2205
 葉ち—2209
 ち—4296
 変づみ
 葉ちみ
 色黄も

以上は、地域と、気象現象の変化による鑑賞の態度からの素材検討であった。即ち、山野を代表する野は（關聯性を含めて）八〇首。屋戸によって代表される庭園は三〇首。露、三六首。鹿、二四首。秋風、一七首。雨、七首。雁、七首。尾花、七首。女郎花、五首。これらは萩が他のものとの係わりを持つ素材であり、これを第一のグループとし、手折る八首。挿頭七首。咲く三七首。散る三五首。咲き散る四首。枝七首。にほふ八首。色づく八首は、萩そのものによって表現される第二の素材グループであった。

五

今第一のグループである露と、鹿、秋風は、もっとも風土における気象現象と密接な関係を持つものと思われるが、本稿では、先ず奈良地方（大和）の気候並びに気象現象の上から露のことを考えることにしたい。これは、大和の風土を考える本稿での根本的な問題である。

奈良県は近畿地方の東南部（北限北緯三四度四七分、南限北緯三三度五二分、東限東経一三六度一二分、西限東経一三五度三分）に位置する内陸である。その面積は三六九二km²で、全国面積の百分の一にあたり、南北一〇二km、東西六四kmで、南北に長いほぼ長四角形をなしている。（奈良県防災気象要覧より）

右に述べられているように奈良盆地は、東は木津川に注ぐ大和高原地帯と、西側は生駒金剛山脈の中間、南部には竜門山地と宇陀盆地との間にある北部低地であって、それに奈良盆地とその東に準平原状をなす大和高原からなる地帯である。そして盆地の西側には、傾動地塊の生駒、金剛山脈がある。

盆地へは飛鳥川、泊瀬川、佐保川、富（蓮）小川、滝田川、葛城川、広瀬川が流れ、盆地のほぼ中央で大和川に合流して生駒、金剛山系を縫って大阪平野へ、又東部には、名張川が木津川に注ぎ、南部には伊勢に対して吉野山地か

(表1) 和達氏, 日本の気候 (日本各地の気候表より抽出)

地名 摘要		京 都			大 阪			糧 原		
		7月	8月	9月	7月	8月	9月	7月	8月	9月
平均値	平均気温 °C	26.0	26.8	22.7	26.7	27.7	23.7	26.3	26.5	22.4
	日最高気温 °C	31.6	32.8	28.5	31.2	32.7	28.6	31.8	32.7	28.3
	日最低気温 °C	21.7	22.3	18.3	23.0	23.7	19.6	22.2	22.1	18.1
1921 と 1950 (30 年間)	相 对 湿 度 %	78	76	79	77	75	76	78	79	82
	降 水 量	190	128	189	148	102	170	163	115	183
	最 多 風 向	S	NE	N	W	NE	NE	N	N	N
	日 照 時 間	206	232	169	230	255	183	215	238	166
	快 晴 日 数	2	3	2	3	4	2	3	5	2

(表2) 日本の気候より, 風速は気象庁月報より
(1940~1956) (17年間)

地名 摘要		京 都	大 阪	糧 原	名 古 屋
平均値の 三ヶ月 平均	平均気温 °C	25.5	26.0	26.0	25.0
	日最高気温 °C	31.0	30.8	30.8	30.5
	日最低気温 °C	20.8	22.1	20.8	21.0
	相 对 湿 度 %	77.7	76.0	79.7	81.0
	風速(1分間平均) (9月 ^M /s)	1.9	2.7	1.3	3.2
	日 照 時 間	202	223	206	211
	快 晴 日 数	7	9	10	10

ら、吉野川が紀の川に注ぎ、その南東部に大台ヶ原山系という日本最大の多雨地帯がある。

今秋の文芸性に問題を絞るため、奈良盆地の夏から秋の気候の主要を、月別平年値表によって観察すると、奈良地方の気候は、京都、大阪と共に日本全国中でも最も暑熱の厳しい地区となっている。

即ち、「日本の気候の気候表によれば」夏の最高気温が、三〇度を越える所謂真夏日が、三〇度以上、三一度未満の地は、東京の三〇・七度を含めて二九ヶ所、三一度より三二度未満は、高田を含め一四ヶ所、三二度以上は福井を含め一四ヶ所、この内最も高温の地は、京都の三二・八度(二〇、三日)、次は大阪の三二・七度(二〇、二日)、と糧原の三二・七度(二〇、二日)、即ち大阪と共に全国二位にある。

しかし暑さの感覚は気温のみでなく、湿度、降水量、日照時間、風速等々とも関係するものであるから、次にこの三地

区^の七、八、九、三ヶ月の平均値を「日本の気候」所収の日本各地の気候表の月別平年値より抜粋すると、

表一によれば、七月の橿原は、日最高気温三一・八度、湿度も七八%で暑さが上位にあると見られるが、八月になると、気温は最高、並びに平均共京都が最高で、湿度も大阪より京都が高く暑いことがわかる。しかし湿度は、橿原の方が二・三%他より高い。そして九月になると、橿原の平均気温は大阪より一・三度、京都より〇・三度低くなっているのにかかわらず湿度はむしろ他より三%乃至六%も高くなっている。これで橿原が蒸し暑いことは大体予想されるが、三ヶ月の平均値を出した第二表を見ると、京都の最高気温との差は、〇・二度であるが湿度は橿原は二%も高く、風速においても、一分間に一・三米で他より低く、快晴日も十日という上位を示している。

これによると奈良盆地の蒸し暑さはほほ明らかになったと思われるが、比較のために名古屋の湿度を見ると名古屋の蒸し暑さが忍ばれる。

さて奈良気象官署が設立されたのは、昭和三四年からで、したがって橿原の平均値による外なく、気象観測の平均値は三〇年を単位とするのが適当とされているが、一般に蒸し暑いと感ずるのは、湿度が七〇%以上、風速が二m以下で、気温二五度位だとされている。そこで先ず、奈良の最近五ヶ年間の統計をとって見ると、

(表3)

奈良の気候表より

(昭和38年42年7月10月抜粋)
集計表内数字は日数を示す

年					月					摘要																																																																					
42	41	40	39	38	7	8	9	10	7	8	9	10	7	8	9	10	7	8	9	10																																																											
20	17	13	25	24	27	27	30	29	23	10	12	1	14	3	0	0	0	0	0	3	7	2	1	1	2	3	6	0	0	18	16	26	14	19	31	31	31	30	31	30	29	31	31	30	27	27	23	27	30	29	26	25	27	29	30	25	26	27	30	9	9	5	10	6	12	12	9	9	8	8	5	13	6	6	13	7	14	3	8
					真夏(気温30度以上)日					最低(19度以下)気温					湿度(70%以上)度					風速(24時間平均1.6m以下)																																																											

表三に見られる七、八月の奈良は、先の風速等の例に合せ見ても極めて蒸し暑い夏であるということが言えると同時に、九月半ばになると気温が著しく低くなる傾向が見られ、他の三地区よりは朝晩は、涼しさを迎えるで見られるのである。しかしその反面湿度は依然として高くその傾向は十月に入っても降らずむしろ上昇しており、風速は更に微弱の傾向を示している。

さて、ここで万葉の萩と露の問題が浮び上って来るわけであるが、万葉では、露、白露、曉露、夕露、露の白珠、露霜などと詠まれていて、萩の歌の中では、もっとも多くこれと関係し、前述の通り三六首に及んでいる。

ところで真夏日の多い奈良地方も、九月になると、朝夕はぐんと涼しくなることが表三によって伺える。例えば昭和四十年を例にとると、真夏日が三〇日も続いた八月が、九月になるとたった一日になり、最低気温、例えば一九度以下の日が、二六日も続いているが、湿度は七〇%以上の日が二五日も続き、風速の弱い日も一三日と、残暑の氣候がつづく。そして十月になると、この傾向はますます強く気温は低くなるが湿度は上昇し風速は弱い。奈良は湿度の高い割合に、最低気温を迎える朝の六、七時には気温が二〇度未満台が二七日、九度以下の日が二日もあるといった状況である。これをもって見れば奈良の九月がいかに気温の日較差のはげしい地域であるかを知ることが出来、更に逆に湿度が他地区より遙かに高い地区であることを知ることができる。

露の起こる現象は、日中の高温多湿の大气が、夜間になると地表の放射によって冷却し、草木の葉や地物の表面に接する水蒸気が凝結して多数の水滴となって現われる。この水滴が露であるが、露は風のない晴れた夜に起る現象であるから、風があったり曇り日では、地表面の冷却が防げられるから起らない。

湿度の多い空氣が露を結ぶ経過は、地面が熱を輻射して冷却すると、これに接する気温が露点温度(18)近くまで下り、その中の水蒸気が植物の葉面に生えている微少な細毛あるいは、地物の表面に附着した「凝結核」などを中心に凝結して水滴となって附着する。これが露で、地物の表面の性質によって露の生じ易いものと、生じ難いものがあるといわれ、主に輻射冷却の激しい面をもつもの、又は表面に微細な突起のあるものなどが露の生成に都合がよいといわれる。即ち露が、瓦石よりも、草葉に着き易いのは葉面から熱を輻射するばかりでなく、水分を蒸発して冷却を助けるからであり、瓦石は伝導によって、地面から熱の供給をうけるから露は割合につきにくい。又露となる水蒸気は、草

葉や地物に接触している薄い気層中に含まれたものだが、結露が始まると、四囲の冷却した水蒸気がこれを補充する²⁰ので、この両方の条件によって露は、結ばれるのである。

このような条件を奈良地方の気象にあてはめて見ると、快晴日数も第二表に見られるように上位にあり、九月になっても湿度は高く、風速は極めて低く、しかも朝晩の最低気温は、他地区よりずっと低い。平年値もそれを示している。したがって奈良地方の九月頃は露の発生に最適の条件といふべきであろう。

この事実は筆者が昭和四十二年八月十六日早朝、特別に許しを乞うて奈良万葉植物園にて撮影した「なぎ」の写真におびただしい白玉の露が美しく結んでいるのを見て、一驚した事にて証される。季節的に言つて露は、秋と春に特に多いのは、空气中に水蒸気の含有量が多く、かつ夜間の冷却が著しいからである。

さてそれならば、萩の花が九月を中心に紅紫色、濃紫色又は淡紅紫色、或は碧紫色に咲き乱れて秋の野を、この国の風土らしく、美しく飾る優雅な風情に、更に萩の露が一層その美しさを添える条件はどこにあるのであろうか。萩の露で共通に云えることは、(一)、細い葉柄を持った三出複葉であること。(二)、葉が橢円形、広倒卵形で丸味の感じ。(三)、葉の色が緑色又は深緑色であること。(四)、若い芽は、先端が円形又は鋭形をなしている。(五)、花については今回は詳しく触れないが一般には紅紫色であること。(六)、葉の裏面が淡白又は紫色で微毛があること。この外、やまはぎ、まるばはぎ、ねこはぎ等は、葉が大体楕円形で、先端も円形であるが、多少の凹みがあること等である。そして、ねこはぎ、まるばはぎは共に葉の両面に微毛を肉眼で見ることが出来ることがある。しかし、ここに筆者が関心を持って観察していた春の或一日、萩の若葉の稍開いた上に朝露が宿っていたが、それは萩の薄い葉の、筋目を持っている葉膜に珍らしく、等間隔をおいて、小さい真珠の玉のような白い露が、五つ、六つ輪を作つてきらめいていることであつた。

この異状な珍らしさを記憶しつつ今回萩の葉を持つて顕微鏡に写して見る機会を得たが、その葉面には、白色の繊毛がやや斜めに、或種のものはやや疎らに、或種のものは無数に突出していることであつた。そしてこのようにことと、先に述べた、放射冷却の激しい面を持つと思われる薄い葉面から輻射する以外に、水分の蒸発によって冷却すること等が、萩の葉に多く白露の宿る諸原因であると思われるのである。

このように万葉における萩は、露と結合して、もつともよく大和の風土を文学の美の上で顕著に構成して行つた。ともあれ外界の諸現象に鋭敏な反応と、享受力を持った古代大和の国の人々は、日本文学の美の発想と創造を逞しうした風土の人間であり、民族の心の詩であるはずの風土文芸を創造した人達であった。

(本稿は本誌二十五号に掲載した「風土気象文芸への志向」の後篇であるが便宜上表題を変えることにした。)

四四・八・三一稿。四五・一二・一二補稿

(注)

- (1) 美夫君志第十二号「万葉集の萩と梅花考」七二頁参照
- (2) 窪田空穂氏「万葉集評釈」第七卷十概説参照
- (3) 古典文学大系「万葉集三」解説十頁参照
- (4) 前掲書同解説参照
- (5) 伊藤博氏「万葉五十九号」同形歌小異歌攷参照
- (6) 佐佐木信綱博士「万葉集研究第三」類歌類句攷参照
- (7) 古典文学大系万葉集三解説の項の高木市之助博士の警拔な学問的論述は、博士の高邁卓越した見識に深い感動を覚えると共に啓発される点が極めて大きい。
- (8) 前掲書同解説の項
- (9) 神田秀夫氏「人麿歌集と人麿伝」六〇～六六頁参照
- (10) 家持の場合は、例えば卷十の作者不明歌、二二九三の「咲けりとも知らずしもあらば黙然もあらむこの秋萩を見せつつもとな」の秋萩を山吹に変えただけで卷十七、三九七六に自作として掲載した。福麿の場合は同じく卷十作者不明歌一九五五「霍公鳥いとふ時なしあやめぐさ纏にせむ日こゆ鳴き渡れ」を卷十八、四〇三五に饗宴の際にそのまゝ詠誦された。
- (11) 空気イオンは主として放射性物質によって作られ、気象状態の相違によって激しく変化し、イオン数の大小がわれわれの健康に大きい影響を与えるといわれ、特に正の小イオンは頭痛不快感血圧亢進などを起し負イオンは鎮静、血圧降下などに好ましい影響を与える。集合場などで起る不快な気持は空気のごよこれいるためもあるが、同時に負イオンが非常に少なくなっているのも原因であるといわれる。(和達清夫監修、気象の事典一七五頁)
- (12) 神山恵三氏「気象と人間」七四頁参照
- (13) 前掲書七五頁～八四頁
- (14) 同一〇一頁参照
- (15) 平均値としては、最近三十年くらいの累年平均値が最も適当で期間が短いと平均値としての信頼性がうすく、長すぎると気候の永年変化

のために現在の気候をあらわしているとはいえない（日本の気候二二二頁）

(16) 和達博士監修「日本の気候」三〇〇頁参照

(17) 気象庁「気象月報」奈良気候表参照

(18) 和達博士「気象の事典」物体を空気中で冷却していくと、ある温度にたっしたときに物体の表面に露ができる。この時の物体の表面の温度を露点温度という。

(19) 岡田武松博士「気象学」第十七章「露と霜」三四一頁～三四五頁参照

(20) 同前掲書三四四頁。